

## 報告 シリアにおける人づくりと国づくり

元国際耕種株式会社  
大沼洋康  
湖東朗

シリアにおいては、これまでに JICA（国際協力機構）の活動として様々な分野での人材育成が展開されてきた。農業分野においては、長期短期の専門家や協力隊員の派遣ならびに技術協力プロジェクトの実施を通して、農業普及や節水灌漑をはじめ様々な分野での活動が行われてきた。さらに、工業や環境分野等での活動も実施されてきた。この間、アサド政権が親子二代にわたって国を統治してきたものの、2011 年のアラブの春を契機とした反政府運動と内戦の激化以降、シリアをめぐる情勢は混迷を極めた。この過程で、多くの市民が犠牲となり、国内外で大量の難民が発生した。昨年 12 月にアサド政権が突然崩壊し、新たな政治体制が発足しつつある。持続可能な平和と繁栄を築くための道のりは依然として険しいものだと思われるが、多くのシリア市民は困難な状況の中で希望を持ち続けている。これまでに JICA がシリアで行ってきた人づくり活動を通して育成されてきた人材が、今後の国づくりにおいて重要な役割を果たすことは間違いないと思う。そしてここでは、そう思うに至った我々のシリアでの経験について振り返ってみたい。

### 1. シリアにおける JICA の活動を通じた人材育成

#### 農業普及改善計画（1994～1997）

当時のシリアにおける農業開発は、食糧だけでなく工業原料（綿花、甜菜）の供給面からも国家開発政策の最重要課題となっていた。水資源の枯渇や塩類集積といった乾燥地に特有な問題を抱える中で、持続的な農業の発展が望まれていた。そうした状況において、普及員の養成や普及計画の立案を含む普及事業の改善を目的として、農業農地改革省・普及局・技術課に大沼が長期専門家として派遣された。当初、受入機関の職員達には普及事業整備を実施する専門家ははるばる日本からやってきたと、まるで他人事のように思われていた。つまり、専門家の役割は普及事業の整備が実施できるような体制の構築や人材の育成であることをなかなか理解してもらえなかった。また、当時のシリアでは上意下達の風潮も強く、自分で考えてどうにかするというよりは、上司から言われたことをこなしているだけの職員が多かった。そこで、専門家は当該分野での技術移転を進める中で、技術課の職員には農家が現場で抱えている問題点を探り出し、解決に結びつくような普及活動の大切さを分かってもらえるように努めた。シリアには娯楽の少ない地方の農民達に歌と踊りで農業技術を伝える移動劇団というものがあり、海外公演にも招待される程の人気だった。この劇団の出し物についても、普及局内の技術課だけでなくメディア課、女性課の職員が意見を出し合って吟味するような雰囲気大切にされた。これまで研究部門など訪問したことがないという技術課の職員を説き伏せて、助言を求めるために研究者に会いに出掛けたこともあった。このようなボトムアップやチームワークを大切にされた体制づくりや人材育成に対して、当初のメインカウンターパートであった技術課の課長は懐疑的だった。しかし 3 年後の派遣期間満了の頃には、こうした日本流のやり方に対して次第に理解を示してくれるようになった。



現場での聞き取り調査



移動劇団による技術普及



研究と普及の連携

### 農業普及員訓練計画（1999～2001）

前述した案件を通して普及員訓練の重要性が認識され、1999年からは湖東が長期専門家としてシリア農業農地改革省・研修局に派遣された。本案件の要請内容は、研修センターにおける普及員に対する訓練活動の強化であり、主な指導内容は訓練のためのカリキュラムや教材の見直し及び改善、普及員訓練を担当する人材の育成だった。まず、既存のトレーニングコースの実態調査を行い、その結果に基づいて普及員のレベルに応じた研修の実施、講義中心の座学ではなく、より実際的な研修の実施、研修内容のニーズ調査とそれに基づく研修計画の作成等、普及員訓練改善のための提言を行った。次に、既存訓練コースのカリキュラムの改善や新規訓練コースの企画及び実施を行った。内容としては、普及員訓練のための講師を育てる TOT (Trainer of Trainers) コース、果樹に関する SMS (Subject Matter Specialist) コース、コンピュータの活用等の新規トレーニングコースの企画と実施であった。さらに、研修内容のニーズを的確に把握するために、農家が抱える問題点を探るための住民参加型の調査手法を普及員訓練コースのカリキュラムの一部として取り入れた。こうした活動を通して、研修局の職員達は既存の研修を漫然と継続するのではなく、現場のニーズに基づいて研修内容に改善を加え、普及員のレベルに応じた研修を行う事の重要性を理解するようになった。さらに、自らの経験に基づいて必要な教材の改善等にも積極的に取り組むようになった。なお、本専門家派遣業務開始当初は、受入機関からの供与機材に対する期待が強く、供与機材があれば専門家の派遣は不要というような極端な意見もあり、技術協力の意義を相手側に理解してもらう難しさも感じた。



TOT コース



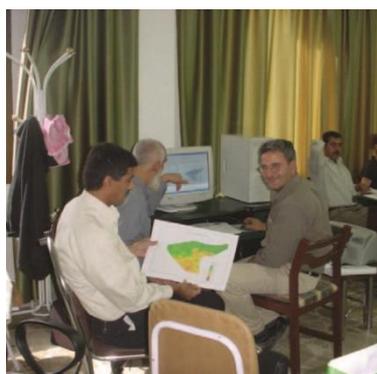
SMS コース



コンピュータ活用コース

### 節水灌漑改良計画（2002～2004）

農業普及改善にしても普及員訓練にしても、幅広い技術分野を対象としていたため、現場での個々の技術分野における成果が見えにくかった。当時、シリアの農業農地改革省は水資源の枯渇に対応するため、灌漑近代化局を設置して節水灌漑を推進することに力を注いでいた。そのため、2001年5月から2ヶ月間にわたって、大沼と湖東が短期専門家として節水灌漑改良に係る調査及び当該分野における案件形成業務を実施した。同調査の提言に基づいて、まずはシリア農業農地改革省・灌漑水利局に湖東が長期専門家として派遣された。本活動のカウンターパートは灌漑水利局の職員であったが、研究職にありがちな現場軽視の風潮が強かった。そこで、現場における灌漑実態や節水に対する制限要因の調査に基づいた試験研究テーマの設定の重要性を理解してもらえるように努めた。効率的な節水手法を適用した展示圃場の設定を通して、研究成果のフィードバックにも努めた。このような活動を通して、カウンターパート達は研究成果が現場で生かされることに喜びを感じると共に、より効率的な技術普及には普及部門との連携が必要であることも理解するようになった。本専門家派遣中に、後述の節水灌漑農業普及計画に係る技術協力プロジェクト（専門家派遣、研修員受入、機材供与等を最適な形で組み合わせた事業）の実施に関する事前調査が行われ、専門家派遣から技プロへとつながっていった。



現状調査結果の GIS 分析



展示圃場の設置



灌水量調査研修

### 節水灌漑農業普及計画（フェーズ1：2005～2008、フェーズ2：2008～2012）

以上の長期短期専門家派遣業務を通して普及局、研修局、灌漑水利局にはカウンターパートとしての役割を担った人材が育ち、節水灌漑技術の開発と技術普及に関連する部局間の横の関係も強化されつつあった。当時、急激な灌漑面積の増加によって水不足が益々深刻になる一方、農家圃場への節水灌漑機器の導入は計画した様には進んでいなかった。そうした状況下で上記事前調査が行われ、節水灌漑農業普及に係る技術協力プロジェクトの実施が決定され、大沼と湖東も団員として参加することとなった。カウンターパート機関は灌漑水利局、普及局、研修局に灌漑近代化局を加えた多くの部局にまたがる形となり、過去の長期専門家のカウンターパート達も本案件のカウンターパートとして名を連ねた。合同会議や合同報告会といった様々なプロジェクト活動を通して、異なる部局に所属するカウンターパート間の交流が生まれ、プロジェクトが関係者間のインターフェースの役目を果たし、部局間の垣根を越えた活動ができるようになった。

フェーズ1の活動内容は、展示圃場設置による適切な灌漑施設の紹介、農業普及員の研修及び農民への普及活動が主なコンポーネントとされた。灌漑施設の設置は灌漑近代化局、運転維持管理は灌漑水利局、普及員訓練は研修局、農民への普及活動は普及局が担当するというチームワーク体制が上手く機能した。各地域の普及員は、研修で学んだ手法を使って現場ニーズに基づいた普及活動を実施して実践経験を積み重ねた。移動劇団を参考にして、自ら立ち上げた劇団に技術普及のための演劇を指導する普及員も現れた。活動に参加した多くの普及員からは、現場経験を積むことによって、これまでよりも自信を持って農家に接することができるようになったという感想が相次いだ。また、現場からのフィードバックによって農家の声が試験研究サイドにも反映されることとなり、灌漑水利局の試験研究担当者からもプロジェクトを評価する声が多く挙げられた。フェーズ1では、「灌漑普及」という専門性を持った「灌漑普及員」という概念の確立と、それを育成する灌漑普及員のための研修プログラムの作成と実施が意義深かったと考えられる。



展示圃場の設置



灌漑普及員の研修



灌漑普及員が指導した劇団

本案件はフェーズ1に引き続いてフェーズ2も実施され、多くの灌漑普及員が現場での灌漑施設診断の技術を身につけると共に、一部の優秀な灌漑普及員は節水灌漑の専門技術員として認定された。こうすることにより灌漑普及員と専門技術員がそれぞれの役割に応じた活動に専念し、農家に対してよりきめ細かな指導ができるようになった。さらに、灌漑普及員が農家の問題点を把握し、適切なアドバイスができるようになることを目指して、プロジェクトは灌漑普及員に対して様々なツールを配布した。流量や水圧を簡易に測定できる器具、適正灌漑水量が簡単にわかる早見表、日々の作業を記録するための灌漑手帳等である。こうしたツールを使って的確な助言を与えてくれる灌漑普及員達に対しては、農家からの信頼度も向上した。さらに、現場の活動で使用するポスターやパンフレット等の普及材料の作成に当たっては、灌漑普及員のアイデアを基に作成することを心掛けた。発案した灌漑普及員が印刷されたポスターを自慢げに披露する姿を見て、彼等の動機付けにも繋がったと感じた。フェーズ2の成果は、活動県の拡大（プロジェクトの水平展開）と、フェーズ1実施県における普及員研修の内部化（プロジェクトの垂直展開）であり、普及ツールや普及教材の開発と活用も相まって、シリア人スタッフ自らで活動を実施していく体制が整ってきたことである。しかしながら、モデル活動で経験を積んだ灌漑普及員が現場での活動に専念できるようになった頃、シリアはアラブの春の流れに呑み込まれ、プロジェクトは2012年に終了した。その後も内戦は収まらず混沌とした状況が続いたが、当時の専門家とカウンターパートは連絡を取り合って一緒に復興活動で力を合わせることを夢見てきた。



流量水圧測定キット



適正灌水量早見表



灌漑手帳への記帳指導

このように農業普及および節水灌漑に関連した一連の活動を通して、シリアでは水資源の枯渇に対応するための節水灌漑技術の開発、開発された技術の灌漑普及員への指導、灌漑普及員による農民への技術普及のための体制が整備され、それに必要な人材が育成されている。

## 2. シリアにおけるアサド政権による統治とその後の動向

### アサド政権による統治

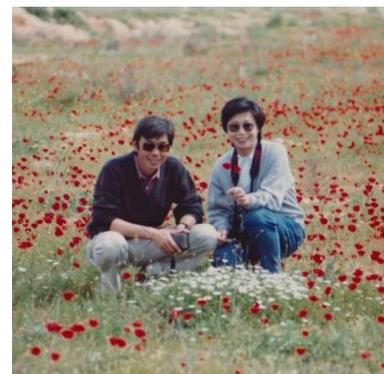
シリアにおいては、アサド政権が50年もの長期間にわたって国を統治してきた。初代のハフェズ・アル＝アサドは1971年から2000年まで大統領を務め、強権的な統治スタイルで国内の安定を維持した。大沼は1994年から3年間、JICAの長期専門家として家族を連れて首都ダマスカスで生活していた。秘密警察による監視の目があるという話があったものの、普通に暮らしている限り基本的には快適な市民生活を送ることができた。街角のスークには旬の野菜や果物が並び、季節の変化を感じることができた。春先には緑のアーモンド、初夏にはとびきり美味しいサクランボ、そして暑い夏にはサボテンの実が氷の上に並び、季節ごとに変わる風味や香りは日々の生活に彩りを添えてくれた。日本人好みのアラビア料理を知っている職場の仲間達は、オクラの煮込みやマハシー（ナスやズッキーニを中空にしてお米、スパイス、肉を詰めて煮込んだ料理）を準備して度々招待してくれた。補習校の遠足で子供達と一緒に、お花見やバーベキューを楽しんだり、日本人会の忘年会で楽しいひと時を過ごしたりしたことも、昨日のこのように思い出す。



春先の緑のアーモンド



サクランボとアンズ



子供の遠足で訪れたお花畑

ハフェズの死後、息子のバシヤール・アル＝アサドが政権を引き継ぎ、2000年から大統領としてシリアを治めた。彼の統治下で、シリアは経済改革と政治的安定の確保を目指した。この間、シリア国内においては、情報通信技術の発展、公共交通機関の整備、電力供給や水道施設の安定化等を通じた近代化が進められ、都市住民の生活環境は大幅に向上したように思う。アサド政権時代の統治が民主的で理想的なやり方であったとは到底言えないが、2011年以降の内戦状態や、それによってもたらされた人々の困難な生活や不安定さを思えば、当時の生活は（秘密警察や軍隊によって保たれていたとは言え）治安もよく、それなりに豊かであった。その頃に実施されていた技術協力プロジェクトで我々は、活動対象地域となった南部のダラー県、中部のハマ県、北部のアレッポ、ラッカ県を動き回った。各地の関係者達と関わり合う中で、モザイク国家としてのシリアを強く感じた。つまり、シリアは古代から重要な交易路の交差点に位置しており、様々な民族や文化が交わり共存してきたという歴史がある。アラブ人、クルド人、アルメニア人、アッシリア人、そしてキリスト教徒、イスラム教徒、ドゥルーズ派といった異なる民族や宗教グループが独自の文化と伝統を育んできた。ずっとアラビア人だと思っていたカウンターパートの一人が、電話で家族と話し出すとアラビア語ではなく、むしろペルシャ語の響きに似た言葉を使っていることに驚かされたことがあった。我々は湾岸地域での経験からペルシャ語になじみがあったので、本人に聞いてみるとそれがクルド語で、数字の1、2、3はペルシャ語と同じだった。イスラム教徒にしても、一般にはスンニー派とシーア派に分かれるが、シリアにはアラウィー派やイスマイリー派といった少数派も存在する。アラウィー派は特に、アサド政権の支配層として長い間重要な役割を果たしてきたが、シリア全体では少数派に過ぎない。このように、アサド政権下ではそれなりに安定が維持された国で、それなりの近代化が進められてきたものの、その裏では多様なイデオロギーや目標の違いが渦巻いていたものと思われる。



果樹栽培が盛んなダマス



野菜栽培が盛んなダラー



ハマの綿花畑での調査

### アラブの春以降の動向

以上述べてきたように、アサド政権の強権的な統治や経済的不平等が市民の不満を募らせる要因ともなっていたようだ。そして、こうした不満が2011年のアラブの春を契機とする反政府運動と内戦の激化に繋がっていったと考えられる。ダラー市で起きた最初の抗議デモは、治安部隊による弾圧を受けたが、それが逆に全国的な反発を呼び、運動は急速に広がった。その当時、我々はフェーズ2の団員としてダマスカスに滞在していたので、どうなることかと思いつつ成り行

きを見守っていた。当初 JICA シリア事務所としてはプロジェクト活動を継続できると予想していたが、政権側の弾圧が強まるにつれて反政府勢力の武装化も激化し、最終的にはシリアにいた JICA 関係者の一時待避が決定され、我々団員も急遽帰国した。その後のプロジェクトは、団員が日本から遠隔で参加することにより継続され、2012 年に何とか終了することができた。この間、日本と現地の間には頻繁なメールのやり取りがあり、カウンターパートによっては写真を添えて現地の様子を実にうまく報告してきた。CC を活用した効率的な連絡が行われ、対策が必要な事柄に絞った相談ができるような体制が整っていった。俗にいう報連相が上手く機能していたように思う。このようにして、日本人団員とカウンターパート達との関係はツーカーの間柄に育っていった。その後もシリアでは多様なイデオロギーを持つ反政府勢力が並び立ち、内戦状態が続くこととなった。この過程で、多くの市民が犠牲となり、国内外で大量の難民が発生した。国際社会もシリアの状況に注目し、様々な介入や支援が行われたが、複雑な地政学的利害関係によって解決への道のりは困難を極めた。

### 3. 日本の技術協力と育成された人材による国づくりに対する期待

#### ICARDA に対する支援活動（2019 及び 2022～2024）

2011 年のアラブの春を契機とする反政府運動と内戦の激化により、シリア国内の農業生産は大きな打撃を受けた。2019 年には FAO (国連食糧農業機関) / ICARDA (国際乾燥地農業研究センター) の支援により、隣国レバノンにおいてシリア人スタッフを対象とした灌漑システムの復旧や応急補修に係る研修が実施された。この研修には、前述した節水灌漑技術協力プロジェクトを経験した日本人専門家とカウンターパート達が講師として参加した。研修を通して参加者が作成した行動計画案を考慮しつつ、現場の農家が抱える問題点や水資源量と水質に応じた対策を検討することを目的として、2022 年には ICARDA の支援での節水灌漑普及活動が開始された。この活動には ICARDA の現地スタッフに加えて、技術協力プロジェクトに参加して節水灌漑技術の開発普及に豊富な経験を持つシリア人カウンターパート達も参加することになった。現地での活動に対する後方支援のメンバーとしては、ICARDA の専門家に加えて技術協力プロジェクトで研修と普及を担当した我々も遠隔で参加することとなった。現場においては節水効果が高いと考えられる候補灌漑手法として、太陽光利用灌漑システム、ゲートパイプ灌漑システム、レイズドベッド灌漑システム、家庭菜園用タンク灌漑システム等を想定していた。そこで、まずは対象地域の農家を対象として、土地、水、作目に関連した一般情報に加えて農家が現場で抱える問題点や想定された候補灌漑手法に対する意見等についても調査を行った。調査結果の解析過程では、それぞれの候補灌漑手法のデモ活動に適した地域や農家の選定も行った。デモ活動では、それぞれの灌漑手法に適した作物を実際に栽培し、灌漑手帳を使った費用便益分析を基に各灌漑手法の効果を評価した。さらに、参加者に対する研修活動として、節水の重要性や灌漑手帳の利用に関する講義、デモ農家や灌漑資機材の生産工場の見学に加えて、農業試験場に準備した研修圃場での配管や灌水量の計測に係る実習も行った。元カウンターパート達は過去の活動を通して得た技術や知識を駆使して、現地でのデモ活動や研修活動を理想的な形で成し遂げた。遠隔で支援していた我々とは、肝心なことに絞った相談ができた。我々と元カウンターパート達はこうしたやり方に極めて習熟していたこともあり、得られた成果は ICARDA の期待にも十分に込められるものだった。この活動を

通して我々が強く感じたことは、内戦によって破壊された灌漑システムの復旧活動や節水灌漑手法の農民に対する普及活動は、日本の技術協力を通して育成されてきたシリア人カウンターパート達を中心とした現地人材だけで十分にやっていけるという事だった。



農家調査



デモ農家



配管研修

### 日本の技術協力に対する期待

1994年に始まった農業普及改善計画から2024年に終了したICARDAに対する支援活動に至るまでの30年間に亘って、我々は長期短期の専門家やプロジェクト団員として一連の技術協力活動に参加することができた。最初から30年計画として実施されてきた訳ではなく、その時その時の現場におけるニーズに基づいて、必要と考えられる活動が計画され実施されてきた。一連の活動に対して専門家や団員を派遣した組織が変わらなかったことや、シリア側の中心人物/キーパーソンとなる複数のカウンターパート達とも長期間に渡る協力関係を保てたことも、重要な点だったように思う。活動毎に実施側の組織や受入機関のキーパーソンが変われば、今回のような成果には結びつかなかったかも知れない。我々は全ての活動において、現場からの発想を常に大切にしてきた。お陰で、普及員や研究員は農家の声に耳を傾け、研修員は普及員の声に耳を傾けるようになった。灌漑水の塩分濃度や果物の糖度を測定できる器具を持った普及員が農家から頼られたという長期専門家時代の経験をヒントに、灌漑普及員にも様々なツールを持たせた。また、普及員にとって大切なことは場数を踏むことであると感じていたため、プロジェクトとしては関係者が様々なタイプの普及活動（セミナー、フィールドデイ、演劇等）を企画するように仕向けた。さらに、異なった部局の関係者達による会合や、彼等が力を合わせないとできないような活動（研究者による普及活動の評価等）を数多く企画した。こうして、関係者間の交流が活発となり、チームワークで対応することの大切さを体得してくれたように思う。このような幅広い活動を通して育成されてきた貴重な現地人材は、今後様々な分野において有効に活用されるべきであろう。JICAによるこうした現地人材の有効活用によって、活動の内部化が促進できるだけでなく技術協力のコスト削減にもつながると考えられる。長期に亘って活動が継続されると、過去のカウンターパートが要職に就くようになり、このことがプロジェクトに対してプラスの効果を及ぼすことも重要な点である。このように、同じメンバーが大きな目標に向かって長期間に亘って活動を継続してきた今回の事例は、今後の日本の技術協力の在り方に対して重要な示唆を与えてくれるものと思う。

## 育成された人材による今後の国づくりに対する期待

昨年12月にアサド政権は突然に崩壊し、新たな政治体制が発足しつつある。既述したように多様なコミュニティが共存するシリアにおいて、新しい政治体制の下で持続可能な平和と繁栄を築くための道のは依然として険しい。長期にわたる内戦と政変によるインフラの破壊が深刻で、復興には多額の資金と時間が必要となる。失業率の高さや生活物資の不足など、国民が直面する困難も少なくない。大量の難民や国内避難民が帰還し、彼らの生活再建も大きな課題となる。教育や医療の復興も急務であり、これらの基盤が安定しなければ、持続的な平和と繁栄は望めない。このように、シリアの現状は多面的で、一筋縄では解決できない問題が山積している。一方、既述したように、多くのシリア市民はアサド政権時代がそれなりに安定していたことも経験している。従って今後のシリアの国づくりについては、欧米の価値観で決めつけるのではなく、それなりの方法があるはずで、その実現が望まれるのではなかろうか。多くのシリア市民は平和で自由な国づくりに向かって、困難な状況の中で希望を持ち続けている。農業分野では普及や灌漑だけでなく、畜産、養蜂、農業統計等の分野での活動も行われてきた。農業分野だけでなく、工業分野や環境分野そして下水道や都市開発の分野でも経験を積んだ人材が育成されてきた。こうした人材もこれからのシリアにおける国づくりにおいて重要な役割を果たすことが期待されている。我々の元カウンターパート達にはイスラム教徒もキリスト教徒もクルド人もいるが、彼等から届くメールには一様に「平和な国を築きたい」という切実な言葉や願いが溢れている。元カウンターパートの一人からは、新政府の農業農地改革省で国際協力局の局長に抜擢されたというニュースも届いている。これまでに我々がシリアで行ってきた人づくり活動を通して育成されてきた人材は、現場からの発想やチームワークを大切にするという考え方をこれからの活動にも生かしてくれると思う。彼等が今後のシリアの国づくりにおいて重要な役割を果たせることは確かだと思うと同時に、そうなることを心から願っている。